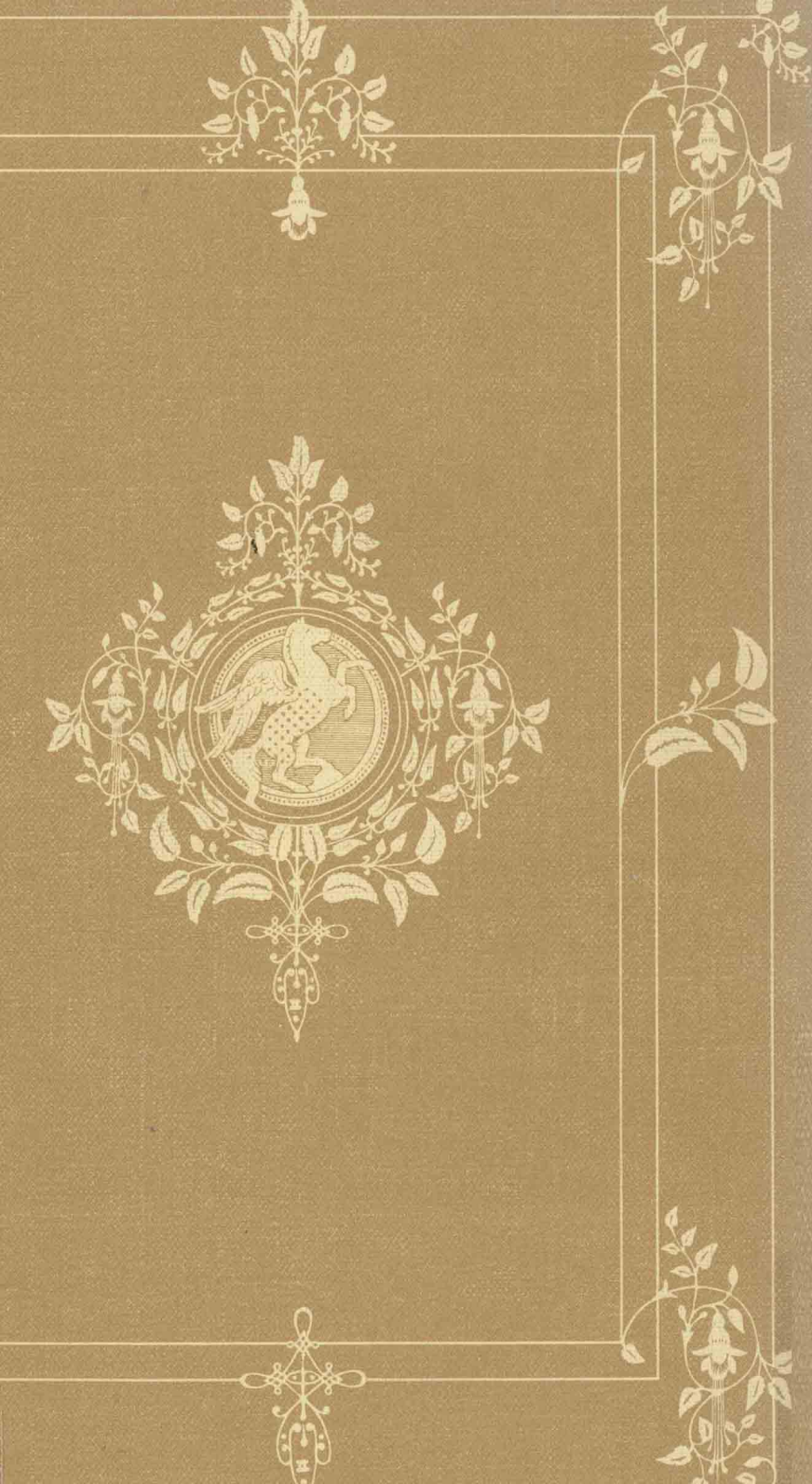

キリスト
文学の世
4

シムノン　リヴィエール

キリスト教文学の世界

4

シムノン
GEORGES SIMENON

リヴィエール
JACQUES RIVIÈRE

主婦の友社

〈筆・訳者紹介〉

小川国夫　1927年生まれ。作家。
三輪秀彦　1930年生まれ。明治大学教授。
矢代静一　1927年生まれ。劇作家。
上総英郎　1931年生まれ。文芸評論家。

キリスト教文学の世界　4
シムノン　リヴィエール

昭和五十三年八月二十五日　第一刷発行
定価一八〇〇円

発行者／石川晴彦
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一―六
郵便番号　一〇一
振替　東京二―一八〇番
電話　東京（〇三）二九四―一一一一（大代表）
印刷所／大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

© SHUFUNOTOMO CO., LTD. 1978 Printed in Japan 0398—968322—3062

目次

シムノン
〈解説〉フランクの復活　小川国夫　5
雪は汚れていた　三輪秀彦訳　15
人と作品……三輪秀彦　300

リヴィエール
〈解説〉回心・純粋な虚無からの脱出　矢代静一　179
クローデルとの書簡　上総英郎訳　195
人と作品……上総英郎　303

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

シムノン

〈解説〉

フランクの復活

小川国夫

世界のどの地域にも宗教がある。少くともその影響は如実に残っている。平和な時代なら、それは昼間の幽霊のようにしか見えないこともあるが、戦争の時代には、息を吹きかえしたおもむきとなり、人々の心に光と影を刻む。たとえばある町の眺めについても同様なことが起こる。眺めとは人間の心情の写しなのだから、当然といえば当然だが、しかし人はその眺めからかえって示唆を得、時には啓示さえも受ける。雪は汚れていた。何でもないことだ。そこが町なら、降り始めた時以外は、大方、雪は汚い。泥や埃や油煙が混るからで、雪国の人なら今さら気にすることでもないだろう。しかし、雪国の人であるにもかかわらず、ジョルジュ・シムノンには、雪が汚れていることが、不幸を告げる根強いリフレインのように思えた。それが特別な意味を持ち始めた原因は、この場合も戦争であった。大昔、イザヤやエレミアの視界もこのように黒ずんだものだ。彼らの眼前にも虐げられた風景、犯された風景があった。しかし、

彼らは倦くことなく神を呼び続け、その声は天にとどき、虚しい声は遂に裏づけを得た。雪は無垢のものとなった。正確にいうなら、雪の汚れを人々は気にしなくなった。汚れから人々の偏執の眼は離れた。イザヤやエレミアは神の意思を証明したのだ。

この構図はシムノンの作品に形をとっている。凌辱されている土地が描きだされる。ただ彼の作品が予言書と違っているのは、そこに予言者がいないことだ。舞台があり、脇役だけは登場するが、主役がいない。勝利を得る人がいない。神の意思を、たとえおぼつかない形にしろ、証明する人がいない。したがって裁きもなく、そこでは惨劇もなんとなく終るだけだ。というよりも、終らないというべきであろう。雪は汚れていた、という内心の声も過去にはならない。それは果てしなく繰り返される哀歌であり、いっそ一口に、雪は永遠に汚れている、と歌ってしまったほうがましだ。

雪を汚しているのは自分も含めた人間たちだ。シムノンによれば、人間は雪を汚しつつ生きなければならないのかもしれない。たとえ汚れた雪に気づいたとしても、人間はそれに堪えながら生きなければならないのかもしれない。

この小説の中でそうした堪える生き方を象徴しているのは、恐らく、電車の運転手ホルストなのに違いない。暗示的ながら、私たちは彼が知恵ある人だと知ることができるし、希望に燃え勇気ある彼の息子も、盗みを働き自殺しなければならなかったことを、彼は辛い思いをして受け容れ、娘が言うに言われぬ汚辱にまみれたことも、恐らくは息子のゆえに、赦そうとしているのだから……。

ジョルジュ・シムノンは《雪は汚れていた》で次のように言おうとしているのかもしれない。ホルストはだれの父親なのだろう、だれの肉親なのか……、と。彼は囚人となったフラン

クに面会に行った時、〈地獄へ行け、人非人〉と言うべきであったのに、そんなふうに言う気振りも見せず、〈というわけだ、人間という商売はむずかしいものだよ〉と言い、〈また来るように努力するよ〉とつけ加えた。さらに〈元気をだすんだ、フランク〉とも言った。

娘が裸にされ、闇の中で他の男に手渡されたことを、ホルストは知らないのだろうか。娘はフランクを愛していたので、父親に喋らなかったのだろうか。彼女はヴィンマーさんには喋ったのか、喋らなかったのか。それとも、ヴィンマーは彼女からそれを聞いたが、ホルストには喋らなかったのか。そんな奇蹟が起こったのだろうか。しかし、もしこの奇蹟を否定すれば、近所の気のいい中年男として静かに笑っているホルストの態度を奇蹟だと思わなければならない。さらに、ホルストに関する奇蹟はそれだけではない。鞣革工場のわきで、フランクが〈宦官〉を刺し殺したと、彼は感じたに違いないのに、まるで盲であったかのように、見ていないことにしてしまっている。

一方、こうしたホルストの在り方に呼応するかのように、殺人者フランクの心理にも奇蹟のような動きが起こる。

殺人の分野では〈童貞〉だったフランクは、まるで実際の童貞を失った時のように、他愛なくそれをやろうとした。そう考えたのは、勿論彼が十九歳だったからであり、しかも、十九歳でありながら、女と寝るのを面倒くさいと感じるほどになっていたからだが、鞣革工場の煉瓦塀に沿って、零下二十度の真夜中に、彼が夜勤から帰る電車の運転手に出会った時、彼は自分の今夜の殺人の真の動機に思い当った。つまり、自分はこの電車の運転手のために、――〈あんたは、ただの穴ね、ほんとに〉とフランクの母親にいわれていた、やせこけて肌がささくれ立った、股を開いて仰向けになっていることしかできない女に失望したあまり、インポ以上の

ことができなくて、〈宦官〉であることを立証したと推測されてしまった占領軍憲兵を殺すのであり、できたら、電車の運転手に、殺人現場に立ち会ってもらいたかったことに、フランクは思い当った。この心の動きも奇蹟とでも称ぶより他ないではないか。

何といっても十九歳のフランクは、近所に住む電車の運転手のために殺人を犯したのだ。自主性のない与太者が、戦争の空気に染まって殺人趣味にはまりこんだというのなら、奇蹟ではない。まして、占領軍の憲兵憎さに――たとえそれがれっきとした抵抗の自覚によらなくても――ナイフを突き出す激情にかられたというのなら、勿論奇蹟ではない。しかし、ほとんど話をしたことはなかったし、全身が灰色に見え、吸取紙を思わせ、いつも小わきにかかえている弁当のブリキ箱以外には、ほかに何の関心もなく、誰の顔も見ないし、それでいて、謎の人物でもないような隣人のために、フランクは殺人を犯したのだ。

これらのことは奇蹟なのだろうか。奇蹟でないとすれば、読者は推理しなければならない。そして、この推理は恐ろしく難解そうに見える。しかし、私は、奇蹟でないと仮定して、推理を試みてみよう。

先ず、フランクが、自分は電車の運転手ホルストのために殺人を犯すと感じたことだが、これを関係妄想と称んでみたらどうだろうか。話はいくぶん見えてくるような気がする。神でも父親でもあり得ないホルストに、だれの息子でもないフランクが〈わがなすところを見よ〉とでもいっているような、特定の存在に対する自己顕示欲を感じているとしたらどうだろうか。丁度、自閉的な若者が始めて詩を書こうとして、だれのために、と思い、先ず〈詩人に〉と献辞を記すようなこととして……。

関係妄想……。この場合、メリットによってではなく、デメリットによって関係しようとし

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ているのではないか。怖れと期待にたかぶって裸になったシシイを、かつて納屋で女を絞め殺したこともあるクロマーに手渡したことも、彼女の父親への罪作りが狙いであったとはいえないだろうか。そう考えるなら、グリーン・カードと大金を手に入れることも、同じ関係妄想の影響がないとはいえない。その昔里子に出されたフランクにとって実質の故郷である郊外での殺人も、彼が考えるように運命に挑んだというより、罪作りによって、きずなをのっぴきならないものにしようとしたのではないか。だからフランクは、後に収容所で幼児体験を思い出すのだ。……故郷のポルス夫人の猫は、傷つけられ、片眼がとび出してしまい、木に登っていた。夜になっても梢にとどまっていた猫は、人々が手を差し出して呼べば呼ぶほど高みへ行き、遂に姿を消してしまった……。

一方ではフランクは、その猫の姿を仲介にして、自分とシシイを結びつけようとする。……シシイだって片眼がとび出してしまったようなものだ。自分だって片眼ぐらい眼窩からとび出したっていい……。

娑婆にいた時には、彼は、ホルストの家に罪を作ることによって関わろうとしていたのに、収容所に入れられると、シシイと不幸を共有したいと言う。現実には、彼は罪作りを避けられない人間なのかもしれない。しかし、その家から遮断されてしまうと始めて、まともに関わりたいという願望を抱く。どちらが彼の正体なのか。

独房の窓からは、遠く体育館の向うに、一つの窓が見え、アイロンをかけている女がマリオネットのように小さく見える。赤ん坊がゆりかごの中に寝ているのも見える。夫は朝出て行き、夕方戻ってくる……。こうした、恐らくは退屈な実質性が、彼の願望が肉感を帯びるほど激しく生きる場なのだ。しかし、現実にそうなることをはばんでいるものが、彼の中にはあ

る。彼は矛盾なのだ。収容所を出たいとも思わず、占領軍のだれをも恨まず、定規で殴られ、歯が二本とんでも、疲れきって頭がふらついても堪えている。彼は我慢強い、天性の囚人だ。娑婆は禁断の願いの中に、正しい関わり方を現わすが、彼がそこへ行って接触すれば、幻想をうながしたてるだけで、あるべき関わり方を隠してしまう。

彼は運命を受け容れまいと決意しているし、不断に運命に挑もうとしている。この十九歳の観念は不毛な片意地に終るしかないと言うのはた易いが、われわれのうちの誰も、彼の実存の闇まで降りて行くことはできないのだ。彼の前では、連帯などという言葉はしらじらしい。性格は量り知れないなどという、もっともらしい言い方も力を失う。彼はたとえどこにいても囚人であり、われわれの共感も反感も届かない所で、孤立した人間像としてそそり立っているからだ。〈ぜひともあなたに申し上げたいのは、《雪は汚れていた》が、英雄といってもおかしくない怖るべきフランクの性格のおどろくべき確立によって、わたしを仰天させたことです（仰天などという言葉はきらいですが、しかたありません）。見事です〉アンドレ・ジッド。

皮肉にも、戦争の何たるかもろくに知らなくて、凌辱された舞台での脇役中の脇役にすぎないフランク・フリードマイヤーは、主役の相貌を帯びる。というのは、一つには、たとえ彼自身が何と思っていようとも、戦争に染まりきって、凌辱された舞台に生き抜き、銃殺されたからだ。フランクを戦争の子と称んでもいいであろう。

二十二歳のクロマーもまた、別の意味で戦争の子であった。彼の精気は戦争に呼応し、彼は活気づき、直観は生き生きと働いた。フランクはこのようなクロマーに挑撥されただけだ。クロマーはすでに二人も殺しているのに、フランクはその意味で〈童貞〉だったことを恥じただけだ。だからフランクは占領軍憲兵を殺すと、奪ったピストルを持ってチモの店へ行ったの

だ。フランクはクロマーにいった。〈使う機会がなかったんだよ〉。それなら、クロマーは〈機会〉を与えてやればいい。その報酬として、フランクがグリーン・カードを手に入れたら、またそれを使うための別の〈機会〉を与えてやればいい。クロマーは〈機会〉を思いつくだけでいい。フランクはすでに戦争に誘惑されているのだから、クロマーは誘惑する必要もない。たとえ、二人の眼が正反対の方向を見ていたとはいえ――というのは、フランクは内心の決意を見つめていたし、クロマーは周囲の情勢を見つめていたということだが――二人とも戦争に深入りして行ったことになる。クロマーは戦争を泳いだのだし、フランクは戦争に沈んで行った。

収容所に入れられたフランクが気づいたのは、戦争の滲透力であった。当然のことながら、それは売春宿に滲透していた。一年以上前のことだが、ビール醸造元のレーブという男が銃殺されたことがあった。彼の地下室は秘密兵器工場であったという。だから収容所の主任はフランクに突っこんで聞くのだ。〈お前と一緒に寝たとはっきり言っているんだ〉〈そうかもしれません〉〈何度ぐらいだ〉〈知りません〉〈お前はアンナ・レーブがおたずね者だったことを知っていたろう〉〈そんな話はぜんぜん聞いたことがありません〉〈彼女の父親が銃殺されたことも知らなかったのか〉。また収容所の主任は次のようにも聞く。〈将校たちは長い時間いたこともあっただろう〉〈そのために来たことをするあいだだけはいました〉〈彼らはおしゃべりをしていたか〉〈わたしは部屋のなかにいたわけじゃありません〉〈彼らはしゃべっていたんだ。男たちはいつでもしゃべるのだ〉。

収容所の主任が聞き出そうとしても、空しい。主任の疑惑と期待は馬鹿らしく大きすぎるのだ。勿論ロッテの売春宿の毎日がどんなものであるか、彼が知らないからだが、フランクはあ

るがままを知っていて、その通りに答えている。

フランクが年の割にくわしいのは、女たちのことだけだ。それ以外のことは、彼は余りに知らな過ぎる。巨大な蟻地獄のような戦争について知らないというのなら、彼は十九歳なのだから、話はわかる。しかし彼は自分の父親が誰であるかさえ知らない。だから彼は、氷の華が凍てついた窓へ顔を寄せて、穴を覗くようにして、一人の男を見つめる。ホルストは白っぽい枠に囲まれ、他の中年の男たちから隔絶され、特別な存在になってしまう。フランクが正確に観察しようとも、畢竟ホルストは、過剰な関心が結ばせた虚像となる。本当の父親は誰だろうか……。刑事クルト・ハムリングかも知れない。しかし、フランクは、ハムリングにはそれほど関心を示そうとはしない。

フランクは本当のことを知りたくないのだろうか。知りたくないのだ。ロッテに対しても同様ではないか。彼女が自分は確かに母親であると言うから、彼は息子になっているだけだ。

彼は白紙を求める。そこへ彼は、自分で自分の絵を描きたいのだ。まずもって、白紙が与えられなければならない。もしそこにすでに絵が描かれていたとすれば、それは汚れにすぎない。

〈汝、生まれざりしならば、良かりしものを〉というキリストの言葉は、ユダを励ますための言葉だったという説がある。お前はこのように生まれないほうがよかった、生まれ直せ、と言ったのだという。つまり、お前にとって運命となっていることを、思いきって否定せよ、という意味なのだという。そうであろうか……。ともかく、人間にとって復活とは、この意味のユダの復活しかあり得ない。神は聖いから復活したのであり、人間は汚れているから復活したいと希望するのだ。神を信じている人なら、その恵みによって再び白紙の生を与えられることに

あこがれる。しかし、神なきフランクは、ひたすら自力で、白紙の生を得ようと意思した。それは、けなげな意志、暗く危険な意思だ。雪は汚れている。だからそれを顧みることなく、汚れていない雪を、自分で獲得しなければならない。自分は存在せしめられた者ではない、存在する者にならなければならない、と十九歳のフランクは決意した。

この稿を終るに当って、私は解説者として最少限のサーヴィスを、読者にしておこう。というのは、冒頭のあたりで奇蹟という言葉をしきりに使い、奇蹟でないとすれば、恐ろしく難解な推理だという意を述べた件(くだり)についてだ。つまり、フランク以外の人物に関しても私流の絵解きを書いておこうということだが、それも、然り、否という断定とはほど遠い、心を残しつつ、こうだと推測する、という程度のものだ。

先ず、私がホルストについて〈娘が言うに言われぬ汚辱にまみれたことも、恐らくは息子のゆえに、赦そうとしているのだから……〉と書いたのは、それ自体矛盾だったといっておかなければならない。読者はすでにお気づきであろうが、その少しあとで私は〈娘が裸にされ、闇の中で他の男に手渡されたことを、ホルストは知らないのだろうか〉といぶかっているのだから、先の断定は無責任だとそしられても致し方ない。乱れがあったのだ。というのは、私が迷っていたことに他ならないが、ここで迷いをたな上げにして、賭けともいうべき私の立場を示しておこう。

シシイはフランクに弄ばれ凌辱されたことを、ヴィンマー老人にも、ホルストにも言わなかった。ヴィンマー老人は何か気配を嗅ぎつけていたかもしれないが、シシイはそれを揉み消してしまった。だからホルストは娘の不幸については何も知らなかった。鞣革工場のわきの殺人については、被害者が占領軍の憲兵下士官だったのだから、フランクを犯人らしいと気がつい

ていたとしても、ホルストは自分の疑惑を口外しなかった。それが占領下の人間としては、むしろ自然な在り方であることは言うまでもない。そして、かつてこの疑惑を抱いたことがあったからこそ、ホルストはフランクを収容所に訪ねる気になったのではないか。彼もまたフランクのことが気に懸ったのだ。その上、一人娘がこの若者を愛しているというのだから、自分もつきそって、彼女の願いをかなえてやりたいと思ったのに違いない。

ホルストはドストエフスキーの小説に登場するような卓抜な〈思想家〉ではない。かなりかしこいが貧乏で、そして親切な隣人というべきであろう。要するに、平凡な市井の人であった。つまり彼こそ脇役であった。そうであってみれば、ホルストに集中したフランクの果てしない想いは、行きどころのない空しいものとなってしまうのであろうか。それが関係幻想と称ばれるのは致し方ないとしても、はねあがったもの、雲を摑むようなものだと結論をくだされて然るべきなのだろうか。そんなことはあるまい。恐らくここに、リアリスト、ジョルジュ・シムノンの本領があり、思想があるのだろう。地味で平凡な生活こそ、特別な人間のあこがれとなるものだし、その特別な思考が拠りどころとする価値の源であり、そのまま真理とも名づけ得るものだ、これがシムノンの思想——隠された主張である筈だ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com